総合教育センターだより

街路樹

発行　第　２２　号
平成２０年　６月２６日（木）
いわき市総合教育センター
いわき市平字堂根町１－４
０２４６（２２）３７０５

学力向上に向けて ⑬

～ よい授業・わかる授業 ～

単なる自分の考えや経験を通した授業観から、無意識に「枠組み」を作り、教材観が固定化してしまうときがたびたびある。それを自分にとってよい授業、わかる授業と思いこむ怖さ。
「よい授業・わかる授業」といえば、一生涯を「教育の道」にささげた大先輩の、ある教育講演会での内容を紹介したい。
『こんな授業がありました。それは、ベテランの先生の授業で子ども達をよく把握していました。ちょうど事前に子どもに書かせた作文があり、それを他の子どもが読んで「もう少しこういうことを書き足したらいいと思う」という自分の考えを手紙文に書き、その元の作者（子ども）にあげる。元の作者はそれを読んで考えて、直そうと思えば直すし、必要がないと思えば意見を書くでしょう。そういう授業でした。
私の前に座っていた男子がいて、他の子どもから手紙を受け取りました。しばらく読んでいましたが納得がいったようです。「そうだ、友達が言うようなことが書き足りなかった」と思ったんでしょうね。先生からもらったきれいな便箋にその差出人の友達に宛てた手紙を書いたんです。そしてほっとしているところへ、先生が来ました。そうしたら、その大変生き生きした男子が先生を見て、「先生書けました。この文をどこへ入れたらいいでしょう？」と言いました。そしたら先生がその子の頭をやさしくなでて、「それはね、このいい頭が考えるのよ」ポン、とやったんです。子どもはうれしそうでした・・・・・。
それで、この授業は終わりなんですが、その子はその「いい頭」で考えて、そのあとどうしたんでしょうね。・・・・
ところで、「それはこのいい頭が考えるのよ」ポン、でいくら子どもが喜んでもだめです。子どもが喜ぶことをするのは大事だけれども、喜べばいいってものではありません。そのとき同時に何らかの力（学力）がつく。例えば、言葉の力がつくということがなければ、教師の仕事ではありません。つまり「教えていない」わけです。何も教えていないことを「どうぞ考えてください」と言った先生を見てとても心配になりました。』
５年前に「学力低下の声が高い中で考えていること」と題して講演された大村はまさん（当時93歳）の話である。
今、学力向上は非常に大きな課題である。学力向上というと一見難しいことかも知れないが、「どの子にも力をつけてあげたい」、これは教師なら誰しもが持つ変わらぬ願いではないだろうか。教えることにこんなにも情熱を持って、しかも1世紀近くも教育一筋に打ち込んできた大村はまさんは、3年前にお亡くなりになりました。

授業改善・指導技術 ③

～ 1時間の授業で考えたいこと ～

授業づくりでは、目標を具体化し、実態を把握するとともに、年間指導計画や単元計画を立案し、1時間の授業設計を考えることとなる。授業設計や授業するにあたっての基本的な事柄としては、次のことを考慮したい。

□ 板書構成を考え、授業のシュミレーションをする。
　〇めあてとまとめ 〇授業の流れがわかる 〇（資料を貼る）
□ 発問・指示、助言を明確にする。 ← 働きかけを明確に
□ 教えることは教え、考えさせることにじっくり取り組ませる。
□ 授業をダイナミックなものにするため、矛盾・対立・葛藤が生まれる場面をつくる。→ 学ぶ意欲や主体的・能動的追求
□ 教科の特性に応じて、多様な学習活動を工夫する。
　（例）社会科・・・話し合い、体験、資料活用、表現活動など
□ 個への対応をする。→ 補充的学習、発展的学習
□ 指導と評価の一体化をめざす。→ フィードバック
　〇 子どもの反応を注意深く見つめ、「ほめる、ゆさぶる、切り返す、視点の転換を図る、確認する・・・」など鋭く対応
■ 子どもが学ぶ意欲をもって生き生きと取り組み、確かな学力を身につけていくために、習得・探求と、それをつなぐ活用のバランスのとれた授業をつくっていきたい。

学級経営のヒント ③

教室環境づくり・・・学校教育目標を具現化する中心的場所

教室環境づくり（掲示物、実物、作品等の構成）は、色彩豊かで季節感のある環境、工夫とアイディアのある環境、子どもとともにつくる環境、（楽しい、美しい、励みになる、変化がある、考えさせられる、自己成長が自覚できるなどのはたらきかけとなる）を基本として考えたい。
□静的環境・・・〇学校教育目標　〇学年目標　〇学級目標・スローガンなど学級や子どもの願い　〇基本的生活習慣や学習のきまりなど　〇時間割や清掃分担など、
□動的環境・・・〇子どもの作品（最新のもの、温かい励ましの言葉、子ども全員が見える、誤字を直させて）　〇特別活動や児童・生徒会活動の様子　〇各種連絡　〇社会の変化やニュース、学習のまとめや～コーナー　〇月・週の予定や季節感のある掲示や植物
●人権に配慮（提出物のチェックや進度表などは掲示をさける）
■ 整理整頓された環境・・・教師が率先して自らの机の周りを
■ 安全であること・・・子どもたちの目線・動線を考え点検
■ 快適であること・・・採光、換気、気温、備品などのチェック
※ 言語環境（相手を尊重する言葉遣い）にも留意したい。

研修の感想・講義紹介

生徒指導主事研修②

〇 演習を通しての対処法はとても勉強になった。一番大切なのは、初期対応と信頼関係。何かあってからの連絡をとるだけでなく、ないからこその連絡がとても大切だということを再確認した。（小・S）
〇 夏季休業中における生徒指導上の課題を中学校区内で話し合い、地区の実態を把握できたので、全職員に共通実践できるように話したい。（小・S）
〇 演習では、中学校の先生の話を聞くことで、具体的な対応の仕方や未然防止の大切さ、クレームへの対応が参考になった。（小・S）
〇 「クレーム対応10ヶ条」を伝達して今後に生かしたい。（中・S）
〇 夏休みに向け取り組まなければならないことや、生徒に周知しなければならないことなどを確認できました。（中・M）
〇 「決めつけない、抱え込まない、あきらめない」というあたりまえのことが、あたりまえにできる教師でいたいと感じた。（中・O）

初任研授業研修②講義より

～ 教材への「指さし」ということ ～

教師は教材運搬人ではなく、教材への「指さし人」でなくてはならない。つまり、教材を子どもたちのなかに運び込むだけが教師の仕事ではない。教授行為としての能動的活動を呼びおこし、子どもたちの手で教材をつかみとらせるのである。教師が教材をつかんで子どもたちのなかに運び込むのではないのである。子どもたちの能動的活動を呼びおこす「指さし」とは何か。それは主として次の三つだ、とわたしは考えている。教師の「助言・指示」の働きかけであり、「説明」（語りかけ）であり、そして、「発問」（問いかけ）なのである。

～ 広島大附属小　吉本　均校長 ～
「学校教育」昭和56年7月号「今月のことば」より